



識名園

土木遺産の香 第77回

琉球王国 最大の別邸「識名園」 沖縄県那覇市



八千代エンジニアリング株式会社／事業開発本部／パブリックデザイン室
徳武 広太郎／TOKUTAKE Koutaro
(会誌編集専門委員)

琉球王国の世界遺産として息づく識名園

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は琉球王国が数世紀の間、中国や日本、朝鮮などと交流し、その文化を発展させてきたことなどが評価され、首里城跡をはじめ座喜味城址など4つの関連遺跡の合計9つから成る文化遺産が、2000（平成12）年に世界遺産として認定された。

この構成要素の1つである「識名園」は、1799（寛政11）年につくられた広さ41,997m²ともなる琉球王国の最大の別邸で、王家の保養や中国の皇帝が琉球王の即位を認めたことを伝える使者である冊封使の接待に利用されていた。庭園は建物内から眺めるだけでなく、池の周りを歩きながら、風景の移り変わりを楽しむ「池泉回遊式庭園」である。近世に日本の諸大名が競ってつくった造園形式であるが、識名園の池に浮かぶ島には中国風の東屋や琉球石灰岩を利用した石橋など、中国の要素も取り入れた琉球独特の工夫が見られる。なぜ、作庭に際してそのように中国や琉球、日

本の要素を多く取り入れたのだろうか。

識名園の移り変わり

識名園の創設年代は『柯姓国吉家譜』によると1798（寛政10）年に当時の琉球王家から王命が下り、同年4月に着工し12月には竣工したとされている。識名園は首里城の南側にあったため「南苑」とも呼ばれていた。

当時、識名園を訪れた冊封正使・趙文楷とともに招待された副使・李鼎元が著した『使琉球記』によると、「御殿は5棟からなり、軒前に新たに掘られた池が有り、池南側の樹林が十分成長しておらず、盛土した築山は竣工後まだ日が浅い」と記されている。このことから琉球王朝は識名園を急いで整備したことが伺える。

なぜ急ピッチでつくられたかと言うと、尚温王冊封のために訪れた趙文楷らは清の国母逝去の連絡を受け、喪に服することとなったため非公式に行うこととなった。本来、冊

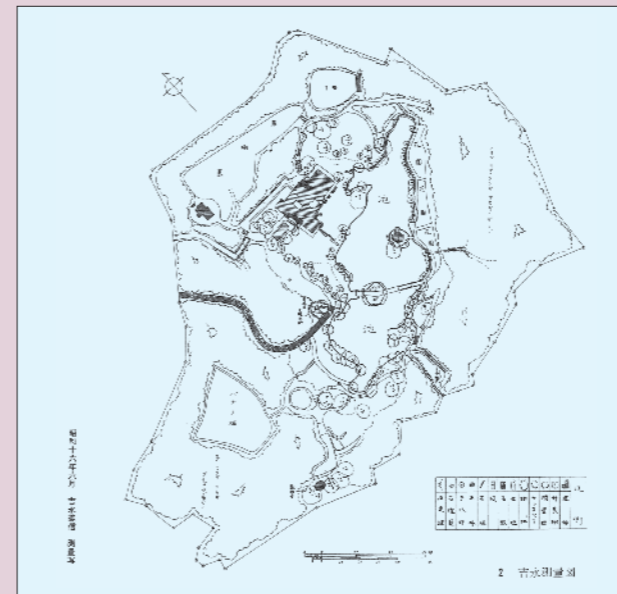


図1 1941年に実施した測量図

封使を接待すべき場所は首里城だが、服喪中のため、急遽識名にあった識名親方の邸宅を買い上げ、接待場所として識名園を整備したとの説もある。

近年では、1931（昭和6）年から測量や建築物などの調査が実施され、1941（昭和16）年からは名勝の指定に向けた当時の状況が把握された。しかし第二次世界大戦中の1944（昭和19）年、園内に集積されていた弾薬が砲火で誘爆を起こし、ほとんどの建造物は一夜にして壊滅的な打撃を受けた。

1971（昭和46）年、沖縄の本土復帰に伴い識名園の復旧事業が開始された。復旧事業は護岸、中島、石橋、長堤、園路等の調査や整備から始まり、門、御殿、番所など20年間に及んだ。

玄関から御殿までの誘い

創建当時の識名園の玄関は現在と異なっている。当時の



写真1 樹木のトンネル

玄関は2つの通用門と正門があり、通用門は識名園で働くものたちが出入りし、正門は冊封使や王族などが出入りした。

園内に入るゴツゴツとした石畳の園路沿いには沖縄の県花であるデイゴ、ガジマルやオキナワヤマコウバシ、マサキなど高木から中低木までの様々な階層の樹木がうっそうと生い茂っている。木々の間からは、幾筋もの陽光が差し込み亜熱帯のジャングルを歩いているような印象を受ける。石畳の園路は、限られた敷地の中でも長く続き奥行きがあるかのような感覚があり、自然の趣を感じさせる緩やかな曲線を描いている。園路を湾曲させることで、琉球信仰のヤナムン（嫌いなもの）やマジムン（蟲もの）と呼ばれる邪悪なものが、屋敷内に侵入することを防いでいる。

石畳の園路を抜けると、いきなり開放的な空間へ変化する。しかし、そこからはまだ識名園の全容は見わたせず、池や石橋の一部の景色しか見ることができない。

近くには池の水源の1つにもなっている、半円形に石積みされた育徳泉がある。石積みは琉球石灰岩を使用し、多角形に加工してお互いがかみ合うようにした琉球独特の呼び



写真2 野面積みと相方積みの擁壁



写真3 心字池の源泉である育徳泉



写真4 御殿(ウドウン)

方をしている「相方積み」(一般的には亀甲積み)である。石積み特有の重厚感がありながらも、美しい曲線が見られ、柔らかな姿の育徳泉を見ることができる。

育徳泉から御殿に向かうと擁壁が現れる。整然とした相方積みから自然石をそのまま積み上げた野面積みへと変化する石積み技術の変遷が見られる。一見、部分的に修復したのかと思えるが、玄関から少しずつ変化させている景色のことを考えると、この擁壁も識名園を訪れた人々が御殿に向かうまでの道中に琉球の自然風景や素材、技法を楽しむ仕掛けであり、人々の高揚感や期待感をくすぐるように設計されている。

琉球らしさが溢れる御殿

ウドウンと呼ばれる御殿は南側の前面に池を、東側に小

さな築山を配置し、うっそうとした樹木に囲まれた中に位置している。東西約30m、525m²程度の木造平屋づくりであり、往時の上流階級のみならず許された建築様式である。屋根には白漆喰をほどこした赤瓦で、周囲の濃い緑に美しく調和している。

冊封使を迎えた一番座、それに連なる二番座、三番座、台所、茶室、前の一番座など、15もの部屋が存在している。一見、1つの建物から構成されているようであるが、主屋、前の座がある建屋、台所部の3つから成る分棟式の建物となっている。これらに渡り廊下や中庭などを巧妙に配置し、一体的な建物として認識できるように工夫されている。

また主屋と前の座の周辺には雨端(あまはじ)を巡らせ軒高を揃えているが、部屋の配置や広狭から生じた棟高の変化は、外から望んだ際の建物や屋根の美しさとなっている。雨端の柱は自然木の形状を活かし、礎石の上に置く沖縄の民家の趣を取り入れている。雨端とは沖縄の民家に見られる軒に差し出した庇のことである。外と内を繋げる空間として位置づけられ、玄関を持たない沖縄特有の民家では、人々との交流の場ともなっている。

御殿に使用されている木材は、創建時と同種同形を踏襲し、主にチャーギと呼ばれるイヌマキを用いている。当時チャーギは禁制材であったが、琉球王国の別邸であったため主要建築材料として使用することができた。

御殿から望む風景

御殿から初めに目に入るのは横長に広がる「心字池」で



図2 御殿の平面配置図



写真5 外と内の中間空間の雨端



写真6 装飾が異なる二つの石橋



写真7 広大な国土のような風景

ある。北東から南西方向に築造された1107.58m²の池である。池敷は元々湿地であった場所と造園のために島尻粘土(クチャ)を造成した場所に区別され、源流は2つある。1つは湿地部で、地下水が地表へ穏やかに湧き出している。もう1つは前述した育徳泉である。

心字池の中には小石橋と大石橋の2つのアーチ橋が存在している。御殿からはじめに渡る小石橋は、海岸で波や風の浸食を受けたような装飾を琉球石灰岩で施されている。一方の大石橋は、側壁が相方積みになっており、船がくぐり易いように真ん中が高くなっている。このようなアーチ橋は中国を代表する景勝地・西湖にある蘇堤や白堤を模したものと考えられている。2つの橋を同形式にせず、どちらかの形を崩す技法は日本の要素で、両国の影響があったと考えられる。また、共に階段の踏面に傾斜をつけている。これは雨量の多い沖縄にとって雨水排水の効率をあげ、橋を渡る際に滑りにくくする配慮がされている。

東中島には六角堂が建っている。屋根は御殿と異なり、中国風の宝形造や黒色の本瓦葺となっている。明治時代末に撮影された写真には、入母屋平屋建ての建物があり、1924(大正13)年以降の写真で六角堂に代わっているため、その間に新造されたと考えられる。

大陸のような光景

心字池や六角堂を経て、再びうっそうとした樹木のトンネルを抜けると「勸耕台」に到着する。那覇市真地の北西部に位置する識名園は、残波岬から那覇にかけて海岸沿いに石灰岩丘陵を形成している台地上にあり、南側が急斜面となっている。

勸耕台は海拔約80mの高台にありながら、海を見ることはできない。現在は住宅などが多いが、冊封使たちが訪れた時は広大な田園がどこまでも続き、緑の中に集落が点在

し、まるで大陸のような光景であったといわれている。中国と比べて国土が小さいことを思わせないように地の利をうまく利用し、遠くの景色をその庭の一部であるかのように利用する「借景」の技法が使われている。冊封使たちは出身地であった中国の福州の田舎に似ていたため、深い郷愁を駆られたと伝えられている。

識名園を楽しむ

識名園が一般公開された1995(平成7)年は、約7万4千人の人が来園し、毎年5万~8万5千人が訪れている。歌会や茶会、びん型織物展、宮廷様結婚式なども催されており、識名園が建設された当時の使い方ではないが、多くの人々に利用されている。

20年に渡り実施されてきた識名園の復旧事業では、創設当時の識名園の風景が上手く再現されている。あくまで推測ではあるが、中国や日本の庭園要素を識名園に取り入れたのは、琉球という南国である故に周辺諸国の文化の影響を受け、独自の庭園文化へと昇華させた結果が滲み出ることや、冊封使を迎えるために中国の文化を積極的に取り入れ歓迎の意を込めていたのではないだろうか。

ぜひ訪れて、人々に識名園を楽しんでもらうことを意識した、あまた散りばめられた工夫に触れてみてはどうだろうか。

<参考資料>

- 1) おきなわ文庫「名勝「識名園」の創設—琉球庭園の歴史—」古塚達朗 2000年 ひろぎ社
- 2) 「名勝 識名園環境整備事業報告書」那覇市教育委員会 1996年
- 3) 「沖縄の土木遺産 先人の知恵と技術に学ぶ」「沖縄の土木遺産」編集委員会 2005年 社団法人沖縄建設弘済会

<取材協力・資料提供>

- 1) 那覇市市民文化部文化財課

<図・写真提供>

- P44上、写真1 細谷次郎
写真2、3 山口佳織
写真4、5、7 徳武広太郎
写真6 塚本敏行